

公益
社団法人

長井教育会

長井の若者の活躍



「物語のある風景セレクション」

山形県立長井高等学校芸術(写真)部



※表紙写真の説明・長井高校芸術(写真)部の紹介は9ページにあります。

内 容

- 1 表紙 「物語のある風景セレクション」長井高校芸術(写真)部
- 2 理事長あいさつ
- 3 感謝を込めて～感謝状贈呈～、総会開催、役員・評議員名簿
- 4 長井ビジネスチャレンジコンテスト
令和5年度経常収支予算並びに事業計画
- 5 記念シンポジウム「このまちに暮らすということ」
シンポジスト 文教の杜ながい事務局長 後藤 拓朗 氏
重要文化的景観コーディネーター 工藤 裕太 氏
東北芸術工科大学非常勤講師 松崎 綾子 氏
コーディネーター 長井教育会文化部長 加藤 芳秀 氏
- 9 お知らせ、表紙について
- 10 入会のお祝い



感謝状受賞の
菊地とく様

- 退任役員
菊地 とく 様
深澤 勝博 様
- 二十五年勤続
岡部栄一郎 様 (舟場)
- 二十年勤続
鈴木 敦子 様 (大町)
- 十五年勤続
平田真知子 様 (寺泉上)
- 十年勤続
佐々木辰巳 様 (五十川中)

この度、昨年退任された理事の方々
と地区委員として永年ご協力いただ
いた六名の皆様に感謝状を贈呈致し
ました。
永年のお勤めに、心より感謝申し
上げます。

永年のご尽力に 感謝状を贈呈

令和5年度 第46回定時総会開催

6月24日(土)にタスパークホテルを会場に、第46
回定時総会が開催されました。

本年度は、来賓に齋藤環樹副市長様をお迎えし、会
員の方に広く参加していただく形で総会・シンポジウ
ムを開催しました。

桑島一郎副理事長が議長を務め、報告と協議が行わ
れました。その結果、議案の令和4年度決算、評議員
の選任に関して承認されました。また、令和4年度活動報告、令和5年度活動計画・予算について
も確認されました。

総会終了後にはシンポジウムが開催されました。詳細は5ページから掲載していますのでご覧
ください。



令和5年度役員・評議員

令和5年度の役員・評議員は次の方々です。昨年度末
の人事異動で変わられた評議員以外は、昨年度に引き続
きになります。

名譽理事長	渡部 秀一	評議員	横山 和彦
相談役	鈴木 泰助	評議員	山口 喜代志
理事長	蒲生 直樹	評議員	岩井 由美子
副理事長	桑島 一郎	評議員	加藤 弘二
副理事長	井上 榮子	評議員	椎名 隆
総務部長	加藤 孝壽	評議員	齋藤 直樹
育英部長	外田 博貴	評議員	須崎 ミチ子
文化部長	加藤 芳秀	評議員	山口 直人
理事	加藤 眞佐夫	評議員	山崎 直人
理事	大沼 正国	評議員	梅津 和孝
理事	松沼 満	評議員	鈴木 正子
理事	梅津 雄治	評議員	安部 義裕
理事	加藤 俊昭	評議員	倉岡 憲雄
理事	菅野 昭浩	評議員	北村 潤
理事	北原 正	評議員	青柳 敦子
理事	高橋 律子	評議員	河村 幸一郎
理事	木村 道子	評議員	赤間 恒生
理事	斎藤 寛	評議員	船山 啓
理事	土屋 正人	評議員	竹田 恒
理事	長沼 真知子	評議員	平田 志
理事	青木 新一	評議員	青木 龍
理事	齋藤 喜内	評議員	飯澤 智弘
理事	新野 義憲	評議員	小野 卓也



変わらぬご支援を

理事長 蒲生 直樹

コロナ禍の中の三年間は、今後の社会の在り様に大きな影響を与えましたが、ようやく今、コロナ前の日常を少しずつ取り戻しつつあるように思えます。

ふりかえれば、この間、公益法人としての長井教育会が抱える最も大きな課題は、将来にわたる持続性を担保する財務状況の安定化に道筋をつけることであり、そのために管理運営面における業務の簡素化や効率化を図りつつ、同時に会員数の維持・拡大による会費収入の安定化を目指すことでありました。お陰様で、業務の効率化と会員の確保との、この二点における実績により、事業面では、一昨年度から長井ビジネスコンテスト、昨年度からは西置賜地区英語弁論大会への助成という新たな形で若者支援が可能となりましたし、四年後の創立五〇年記念事業のための準備資金の積立も行えることになりました。

これも会員の皆様のご支援ご協力があったことであります。改めて厚く感謝申し上げます。
それにしても、急激な人口減少と同時に進む会員の高齢化という、この本会の存立をも危うくする状況下にあっても、三月末現在、二万六千人の長井市民のほぼ五%、二〇人に一人、世帯数で言うと市内七世帯に一人は会員がいらっしゃる。このことの意味の大きさを改めて思います。本会にとつて、会員数の確保の大切さは、単に、先に申し上げた会の運営資金の多寡に関わるからではありません。それは、本会の理念や趣旨が地域にどれほどの広がりを持つかを示すバロメーターでもあるからであります。

そもそも、本会の会員であることに特段何かのメリットがある訳でもありません。にも関わらず、志ある地域の若者を支援したいという、ただ一点、その思いから誰とも知らぬ若者のために浄財を拠出してくださる方が、この地にはこれだけ大勢いらっしゃる。そのことを思うとき、私はいつも深い感動を覚えます。

考えてみれば、かつて、最上川舟運で栄えたこの地は、長井商人が幕末期の米沢藩の財政を陰で支え、明治期にはいち早く村々に小学校を建て、広く寄付を募って中学校の誘致に乗り出すなど、教育文化面における民度の高さや人々の進取の気性で知られた地でありました。この風土に生きる私どもには、祖先のDNAが脈々と受け継がれていることを感じる訳であります。

一〇年後、二〇年後の日本を支える若者達に対してでさえ、国の支援は十分に届かず、相変わらず大学生の多くが奨学金とアルバイトに頼らなくては学資さえも賅えない。この国では、そんな厳しい教育環境が未だ続いています。したがって、奨学支援を目的とする本会の役割にはまだまだ大きいものがあります。皆様の変わらぬご支援を、今後ともよろしくお願い申し上げます。

令和五年度通常総会記念シンポジウム

このまちに暮らすという事

シンポジスト

文教の杜ながい事務局長

長井市重要文化的景観コーディネーター

東北芸術工科大学非常勤講師

コーディネーター

(公社) 長井教育会文化部長

後藤 拓朗 氏

工藤 裕太 氏

松崎 綾子 氏

加藤 芳秀 氏



このまちに暮らすということ



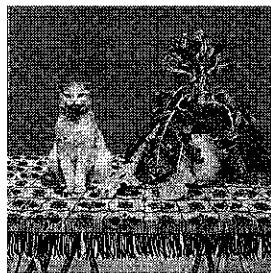
【加藤芳秀】今日は、シンポジウムの開催に当たり、長井に移住して文化芸術に関わる活動をしておられる三名の方をお迎えしました。皆さんからは、長井に移住することになった経緯や長井で暮らしてみたい経験したこと等をもとに「地方と人が輝く未来への提言」を伺いたいと思います。私たちがもしかして見過ごしているような長井の良さや課題について一緒に考えることができれば、と思います。よろしくお願ひします。

長井には日本の原風景がある



【松崎綾子】千葉県浦安市に生まれ、東北芸工大に進学することになって山形に生まれました。大学では日本画を学び、卒業後に夫の生まれ故郷長井市の地域起こし協力隊の仕事を得て三年間活動しましたが、その後結婚し、そのまま長井でアーティストとして活動することになりました。現在は三児の母でもあります。私の絵は写実的なのですが、作品には日常生活

での自身の経験や気付きが反映されています。猫とプロッコリーの絵



(注 下写真)には、生あるものを持つ「生きる意志」というようなものを込めて描きました。出来上がった作品としてはその背後に隠れるのですが、画家の私にとっては作品を生み出すことになった、その自身の思いを大切に描いています。アーティストグループ「アメフラシ」の一員としては、伝統文化の継承プロジェクトで、黒獅子祭りの草鞋づくりや金井神楽作りをしています。同時に、これらの伝統工芸品の制作過程や背後にあるものを人々に伝えるための活動も行っていて、YouTubeチャンネルに動画も公開しています。また、廃工場をリノベーションし、「こしやうプロジェクト」の活動拠点として利用するとともに、地元の人や参加者との交流を通じて、ものづくりやアートに触れる機会も提供しています。「アメフラシ」では、このように地元文化を守りながら、新しい価値を創造する活動を行っています。浪人生を送っていた時、デッサンを勉強しながらいろいろな角度からものを見る目を養うことができました。現在、大学生や一般の人にもデッサンを教えていますが、その際には、デッサンは上手い下

自分たちが暮らす地域の再認識を



【工藤裕太】私は埼玉県出身で、東北芸術工科大学で建築を学び、その後長井市で地域おこし協力隊として三年間活動しました。現在は重要文化的景観コーディネーターとして働きながら、建築設計事務所を経営しています。

建築の設計では、リノベーションや建物のデザインに携わっています。また、成田駅前や市営バスのラッピングのデザインなども手がけました。地域起こし協力隊としては、重要文化的景観の普及啓発活動を主に行ってきました。町歩きのワークショップや建築物に関するトークイベントなどを開催したほか、空き店舗の活用にも取り組んできました。

現在は重要文化的景観コーディネーターとして、観光文化交流を促進する企画に取り組んでいます。昔の街並みの写真を子どもたちに渡し、どこで撮られた写真なのかを探すミッションを楽しくやらせて親子向けの「長井まちなか探偵団」



昭和中期の長井 どの通り？

などのイベントも開催しています。これらの活動を通じて、地域の文化や歴史に関心を持ってもらうことで、その先の地域起こしにつながるような、そんな貢献ができればと思います。

昨年九月に、平野地区の散居地域で大人向けの「まち歩きワークショップ」を開催しました。散居地域は日本の伝統的な農村の風景なのですが、今では数えるほどしかないんです。この時は、芸工大の先生も参加し、地域の特徴についての解説などをお聞きしながら歩きました。また、昔の写真にAIを使って色を付けたものを参加者に見てもらいました。白黒だと遠い昔のことのように思えるものも、カラーにすることで、昔と現在の風景もつながるような感覚を味わうことができたと思います。

同じ平野地区で子ども向けのワークショップも行いました。平野小学校の親子行事で、子どもたちが自分たちの暮らす地域を再認識することを目的にしたものです。参加者には、平野らしいと思う風景の写真も撮ってもらい、それを平野地区の文化祭で展示しました。先のワークショップで大人が撮った写真の多くは、お地蔵さんの表情や自分の足元など、近景に目を向けた写真でしたが、子どもは広い平野の特徴的な風景をしっかり捉えた写真が多く、大人と子どもの視点の違いが分かる面白い企画として好評でした。

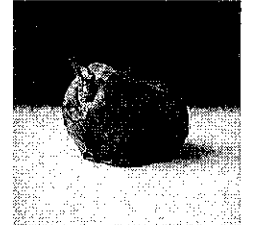
今年も、十日町の景観づくりの一環として行われた板鼻の塗装ワークショップに参加したり、NHKの番組で、重要文化的景観について説明したりする機会がありました。こんな風なことでも、長井市の歴史や文化、景観に関する活動に取り組んでいるところです。

無秩序な状態こそが活性化を生み出す



【後藤拓朗】山形市生まれ。東北芸工大で洋画を学び、現在は「文教の杜ながい」で事務局を務めています。画家としては油絵を中心に制作しています。映像のラフランスという作品についてお話しするとこんなことです。アトリエにラフランスを置いていたら、次第に柔らかくなり、床に落ちて潰れてしまいました。

潰れてしまいました。しかし、ただ腐っているというよりは、とても良い香りがしました。これは腐敗している状態なのか、それとも発酵している状態なのか。混沌とした状態を描いたこの作品は、私は山形の自画像として描きました。展示発表では、美術館やギャラリーのような展示環境ではなく、絵を立てたり、掲示板に飾ったりして個性的な展示空間づくりを心掛けてきました。



油絵「ラフランス」

文教の杜では、複数の芸術分野のコラボレーションを取り入れた新たな展示方法を試みたり、かつて賑わった丸大屋の店舗に、近隣の商店の様々な品物と若手芸術家たちの作品とを並べて販売したりするイベントなどを行っています。文化のやり取りの活性化を目指したこれらの活動に、アーティストとしての経験を活かして、地域社会に貢献できることを願っています。

次に「アートと移住者が町にもたらすもの」について。私は「アートは常に両義的である」と考えており、物事や人の活動には良い面と悪い面が同居していると感じています。悪いところを止めなさいという、良いところも全部消えていってしまう。アートの効能はカオスを創り出すことで、不安定な状態、無秩序な状態こそが活性化している状態だと思います。

これらを踏まえて「アートと移住者が町にもたらすもの」を再度考察すると、都会的でおしゃれな要素を外部から持ち込む必要はなく、表面的な演出にこだわる必要もない。等身大で、美しいものや汚いもの、新しいものや古いものが同時に存在しても良いと考えています。

長井でも、創作活動を愛し楽しんでる人が多くいますが、つながりのない状態です。庶民的な趣味の活動もハイアートの活動も同じ価値観として扱って、ピラミッドの構造を崩し、異なる領域を絡めることで、長井の風土や歴史との相互関係から新たなものが生まれる可能性があります。文教の杜の取り組みでの異なる世代の作家を組み合わせる試みも、異なる評価軸で見ること、活動に変化が生まれ、活性化できます。ラフランスが腐っていることも、

長井での子育て

【後藤】うちでは子ども用品を買うのに苦労したり、一時預かりなんかで苦労したりすることがあるんですが、松崎さんは全然そんなことはないと言われたので、そのことを伺いたいと思うんですが。

【松崎】やっぱり一時預かりの少なさってというのはありますね。でも、都会は都会で、施設は多いんですが、待機児童も多いんです。病院も多く、便利だと思って思う反面、予約がいっぱいで、結局小児科で見てもらえないことも結構ありました。長井に戻ると、今日は予約でいっぱいなんです。今から来られるならいいですよって、迎え入れてくれたり、融通が効くのはこの良さなのかなって思うんです。店が少ないというのはあるんですけど、友達からお下がりももらったりすることもあって、近所づきあいとか人付き合いが深いことにつながりができて来ると思っています。あと、今はネットがすごく便利で、幼児服なんかをネットで買えたりするので、意外と困らないと私は思っています。

アーティストの視点で見た長井

【加藤】工藤さんから他の二人にないですか。

【工藤】アーティスト視点から長井を見て、どう思っているのかというお話を伺えればと思います。

【後藤】アーティストの在り方が様々である中で、自分がどのようなアーティストであり得るかについて、僕は僕にとって大きく大きなテーマです。文教の杜では、実は割と新しいアイデアを出すことが求められていて、そこではアーティストとしての能力を使っていると思います。だから、文教の杜の仕事は、僕にとってはアーティスト業の一つと言えなくともありません。絵が売れなくとも、絵で食えなくとも、アーティストとして生きていくっていうのは、長井に来てからですね。全くマーケットもギャラもありません。価値をすごく高く評価してくれま

す。こんなところでこういうことができるの、すごい頑張ってるなあ、話聞かせてよ、などと言われることもあって、だから、僕はここでアーティストとしての仕事をしっかりやっていると感じています。

【松崎】アーティストとして、さっきの後藤さんの考え、無秩序で不安定な状態が、活性化した状態というのが、すごく良い言葉だと思って思います。アメフラシの名前の由来は、雨を降らせて、地が固まるというか、自然の恵みが活性化するというか、そんなことをアートやデザインを通じてできればいいかな、そんなことを理念に立ち上げたものでした。なかなか無秩序で不安定な状態を作ることが難しいのがアートの魅力だと思います。不安定な状態というのは、やはり見る人にも不安を与えたりするでしょうし、人によっては不快感を持つかもしれないけれども、それが長い目で見たときに、子どもなんかにとっては魅力的なものになって行くかもしれないと思っています。

【後藤】「アートでまちづくり」っていうのは、日本中でトレンドみたいになっちゃってます。アーティストを呼び込んでまちを活性化しようとする、負の側面もあるっていう覚悟がなければ危険ですよ。長井は、受け入れてくれそうな気もするし、そうでない微妙なところもあるし、文教の杜では、ギリギリでも行いたいという、そんな気持ちでやっているといるところですね。

【加藤】フロアの皆さん、どうでしょう。

【青柳】長井高校の校長をしており、子どもたちが鍵を握るというのを伺いました。が、今の高校生にはこんな視点で頑張るって欲しいという



ボジティブに熟成していると感じることができると同じように、町がアートを両面性を持つものとして受け入れられるならば、町自体も元気になる可能性があると考えて良いと思います。

「子どもたちが戻って来たい」と思える環境を作る

【加藤】意見交換の時間を持たたいと思いますが、先ず、私から松崎さんに質問です。「子どもたちが戻って来たい場所」とも、「長井には日本の原風景が残っている」ともおっしゃいましたが、その辺について、もう少し詳しくお聞かせください。

【松崎】子どもたちが長井に戻って来られるような場所づくりを考えています。長井には豊かな自然の風景や典型的な近所付き合いがあり、人間が本来必要とする要素が備わっていると感じています。今、子どもたちの多くは大学や就職のために県外に出ますが、外で経験を積むことで故郷の良さを再認識することもあると思います。また、私たちは建物のリノベーション活動などを行っているのですが、例えばそれに関わったり、そこに思い出や絆が生まれたりすれば戻って来やすくなると思います。そんな環境を作りたいと考えています。

【加藤】工藤さんからの文化的景観のお話と、今の松崎さんのお話がちょっと関わるのかなと思っただけです。

【工藤】文化的景観コーディネーターとして、地元の人や子どもたちに長井の魅力や歴史を知ってもらいたいと考えています。松崎さんが話したように、自分が関わった場所や地域の歴史を知ること、愛着が生まれると思うので、この取り組みを大切に、仕事を続けて行きたいと思っています。

【加藤】先週、講演会で同じようなことを言われたんです。これからの長井では、子どもたちが胸を張って、自分の町は良い町だと言って話せるような教育が必要ではないかと。まさにそのようなことをされて、本当に嬉しく思いました。

次に後藤さん、いかがですか。

【加藤】若い時って、その時しかないですから、勉強でも部活でも遊びでも何でもいいので、100パーセントの力を注ぎ込めたいことを言いたいです。

【後藤】友達や部活の顧問の先生との出会いなど、高校時代が本当に私の原点です。高校生に伝えたいのは、工藤さん以上のものはちょっと思いつきませぬが、全力で取り組んで欲しいということですね。

長井の寛容性

【加藤】他にございますか。

【土屋】長井市で、まちづくりの案を策定していますが、「いつでもいつまでも暮らせるまち」というキーワードについて、ある方と話をしている時に、非常に内向きで抵抗を感じると言われました。三人の方に、寛容性という点から、長井のまちをどう思うかを伺いたいと思います。

高校生へのメッセージ

【青柳】長井高校の校長をしており、子どもたちが鍵を握るというのを伺いました。が、今の高校生にはこんな視点で頑張るって欲しいという

います。引越した時に、早速夕方、地区長さんが挨拶に来られました。多分、これは、特に都会から来た人にとってはびっくりすることだと思えます。ただ、ちゃんと、そういうことを嫌がらず、地域の方々と対話をして、その地域の歴史とか、住まい方とかを受け入れて行くっていうことは、移住者にとっても大事なスタンスだと思います。

【松崎】工藤さんおっしゃる通り、長井は移住者に対してウエルカムな雰囲気があるまちだと思えます。ただ、ウエルカムな分、若い人に出て行かないで欲しいっていう思いも強いのかなって思えます。かえって、高校なり大学なりに出て行っても良いよって、ウエルカムに送り出してくれる雰囲気があると、帰りやすくなるのかなっていう気もします。

【土屋】去る者は追わない、でも待つてるよ、というのはいくくいいなと思います。さらにプラスの部分があれば。

【工藤】僕は仕事も大事なんですけど、仲間っていうのも大事だなと思います。そこに住んでいる人から声を掛けてもらったりすると、移住しやすくなるんじゃないかと思えます。個人的なつながりがあるって、移住しようかなって言う気になるんじゃないかと思えますね。大きなショッピングモールがあるっていうのは移住の理由にはならないので。

便利さと豊かさ

【加藤】次に風間さん。

【風間】先程の便利さと豊かさ、どちらが大事か。どう考えているか、お願いします。

【松崎】便利か不便かで言ったら、長井はそんなに不便ではないと思っています。ネットも使うことができるので。長井で豊かさを求めるのであれば、個人的に求めていくであろうし、なんか便利さの方がいいって言うのであれば、そういう暮らしを長井でもできると思います。

【工藤】長井に暮らして、不便さを感じたことはな

いです。不便というより、豊かさというか、自然が近くにあることとか、町の作り方とかをしつかり勉強すると、すごい面白い町だなって言うことが分かってきたりするので、個人的には、そういう特徴のある、歴史のあるまち長井は、とても魅力的なところだと感じています。

【後藤】パン屋さんとかおしゃれな雑貨屋とかがあればいいな、と。ないっていう点では、まだまだ可能性があるっていうことですね。

【加藤】長井で暮らすということについて、三人のシンポジストの皆さんからいろいろな視点を頂いたなと思いました。

「外から入りやすい町」ということについては、交流人口の増加にも繋がることかと思うんですが、こちらとして「長井から出ていってもいいんだよ、だけど、長井との繋がりは持っていてほしい」という思いを持っていることが大切かと思いましたが、繋がりを持つ場を作る事も大切だと感じました。

「重要文化的景観」ということでは、持続性とやうことを感じました。ずっと営まれてきた農業とか商業活動と繋がった景観がこの町をなしている。昔からのいろんな営みが町並みを作っているんだっていうことを改めて今日教えてもらったなと思っています。

「アートや移住者が町を元気にできるのか」ということでは、なんか動いている、それが一定方向でなくても、とにかく、動きが見えることがまちの活性化を生むことになり、「この町は面白そうだ」という興味に繋がる。必ずしも綺麗なものだけじゃなくて、課題もあるんだが、なんかやるうとしていることが大切で、その動きを作れるのがアートだ、ということでした。

「交流」と「町の持続性」がこれからの未来を開いていくことかと思えます。今日の会は長井の良さや課題、ヒントをたくさんもらったような気がしています。

三人のシンポジストの皆さん、今日は大変ありがとうございました。

※P5下段の写真 風間書店前通り

シンポジウムに参加して

副理事長 井上 榮子

この度の定時総会と記念シンポジウムは、新型コロナウイルス感染症の流行前の形で、四年振りに開催することができました。まだ油断できない状況とはいえ、ほっとしましたし、有難いことだと思いました。

シンポジウムでは、三人のシンポジストをお迎えし、移住の経緯や現在の活動、そして長井で暮らした経験をもとにした未来への提言を伺いました。それぞれが移住者であり、アーティストだからこそ、長井の魅力を創造してくださっていました。何より心強く思い、見過ごしがちな長井の良さや課題を再認識するとともに、芸術文化の効能などを深く考える機会になりました。名コディネーターと会場からの活発な発言のお蔭もあり、二時間があっという間に過ぎたように感じました。充実したシンポジウムとなり、心より感謝申し上げます。

なお、「地方創生のフアクターX」という報告書に、「地方創生のカギは芸術文化であり、地方都市に必要なのはアーティストだ」という提言があります。多様な価値観と寛容性を備えた芸術家が移住すると、地域の新たな可能性を見出すことにつながると言われます。まさに、地方の未来にとって羅針盤となる提言と、本シンポジウムはつながっていると考えています。